

前漢文帝霸陵と江村大墓

西 川 利 文

はじめに

筆者は、二〇一九年五月二七日から六月二日までの七日間、考古学を専門とする旅行社（㈱国際交流サービス）が主催する西安近郊をめぐるツアーに参加した。これには、歴史ファンの方から考古学の専門家まで合計三〇名ほどの参加があり、秦咸陽宮遺跡・漢長陵などの秦漢時期の遺跡から、乾陵・昭陵や大明宮遺跡など唐代の遺跡に至るまで多くの遺跡と、陝西歴史博物館などの博物館を訪れた⁽¹⁾。

本稿で取り上げる江村大墓は、五月三十一日の午前中に訪れた。当初の予定表では「霸陵 新しい発掘現場」と記されていたので、従来から知られている霸陵（後に触れる鳳凰嘴）近辺の発掘現場だと考えていた。しかし進むうちに白鹿原の上にあがり、一時間ほどで文帝の母・薄太后の南陵にまず着いた。南陵についても後ほど触れるが、その後移動して一〇分ほどで「霸陵」に着いた。ここは、以前訪れたことのある小山でできた霸陵とは全く景観の異なる、周りに耕作地が広がる平坦なところであった。ここに発掘現場があり、そこでは墓室の周りにある外蔵坑の発掘が行われていた。発掘担当者から、その耕作地の下にある主体部が江村大墓であり、「真の文帝霸陵」だとの説明を受けた⁽²⁾。

果たしてこの江村大墓が真の文帝霸陵であるか否か、まだ検証が必要なのだろうが、帰国直後に「西安西漢霸陵遺址2017～2018年発掘収獲」（馬永贏等執筆。以下「発掘収獲」⁽³⁾）なる報告を得た。この報告では、江村大墓が文帝霸陵だとは断定していないが、それ以前に発表された楊武站・曹龍「漢霸陵帝陵の墓葬形制探討」⁽⁴⁾では、江村大墓が真の文帝霸陵であることが強く支持されてい



江村大墓西南側外蔵坑の発掘現場入口、奥に発掘現場がある

る。楊・曹両氏も、発掘にあったっている陝西省考古研究院のスタッフであり、しかも曹氏は「発掘収獲」にも名を連ねていることから、現地の発掘担当者は江村大墓が「真の文帝霸陵」と考えていると思われる。⁽⁵⁾

そこで本稿では、「発掘収獲」の情報を手がかりに、現地での説明および現地に掲示されていた解説パネルの情報⁽⁶⁾も参考にしつつ、江村大墓の概要を紹介する。その上で、楊・曹論文が江村大墓を真の霸陵だと考える論拠を検証しつつ、江村大墓の性格を考えてみることにしたい。

一、霸陵陵区と江村大墓

前漢文帝（前一八〇～前一五七在位）の霸陵は、文帝の「敦朴」の姿勢を示すため、自然の山を利用して墳丘を作らなかったといわれる⁽⁷⁾。その地は一般に、現在の西安市東方にある白鹿原の東北部にある「鳳凰嘴」（灊橋区毛西郷楊家圪塔村）だといわれる。

しかしはじめにも触れたように、近年、鳳凰嘴の南西、文帝の竇皇后陵の西一二〇〇mにある江村大墓が真の霸陵ではないかと注目されている。この墓葬は従来、館陶公主（文帝の娘）の墓ではないかと考えられていたが、楊・曹両⁽⁸⁾

氏は、発掘の結果、その規模からして、公主クラスの墓葬ではなく、皇帝クラスのものだと判断した。

「発掘収獲」でも触れているように、現地の発掘担当者は現在、文帝霸陵とされる「鳳凰嘴」と竇皇后陵・薄太后の南陵、および江村大墓を合わせて「霸陵陵区」として一括で把握している。この区域は、近年たびたび盗掘に遭い、二〇一七年に緊急発掘として南陵および江村大墓の外蔵坑を発掘したという〔「発掘収獲」〕。ただ霸陵陵区が存在する白鹿原は漢墓が多数存在し、一九六〇年代から竇皇后陵の陪葬坑と考えられる遺跡が発掘され、さらに八〇年代後半から二〇〇〇年初頭にかけて周辺の漢墓群が発掘されている⁽⁹⁾。そして二〇〇一年に盗掘をきっかけとして、江村大墓の存在が注目されるようになる⁽¹⁰⁾。

ここで楊・曹論文（一一七頁）に掲載される地図【図1】を手がかりに、霸陵陵区の位置関係をまとめると、文帝霸陵とされる鳳凰嘴の南二一〇〇mの所に竇皇后陵があり、そこから西南約二〇〇〇mの所に薄太后の南陵がある。そして竇皇后陵の西一二〇〇mの所に江村大墓が位置する。

さて、最近の発掘によると、文帝霸陵とされる鳳凰嘴からは人工的な開鑿や建造物の痕跡を見つけることができなかったという〔解説パネル〕。そうすると、ここが陵墓である可能性がなくなる。我々は、文帝霸陵に対する認識を大きく変えなければならない。

次に竇皇后陵の規模を確認しておこう。ここはいわゆる覆斗型の封土を持ち、底部は一三七m×一四三m、頂部は三〇m×三五mで、封土の高さは一九・五mである⁽¹¹⁾。

一方、竇皇后陵と同じく覆斗型の封土を持つ薄太后の南陵の規模は、底部が一四〇m×一七三m、頂部が四〇m×五五m、高さ約二四mと、竇皇后陵よりも若干大きい⁽¹²⁾。墓葬形式は「亜」字形で、墓室は七六～七八mであり、墓道は東側が最も長く一四八mあり、封土の周辺に一五の外蔵坑があるという〔解説パネル〕。

さて次に、問題の江村大墓についてである。この墓葬には封土はないが、楊・曹論文（一一七～一一八頁）によると、墓室の規模は約四〇m四方で、深さ約三〇mである。墓室の中には三つの回廊があり、墓壇に磚を緻密に貼り付

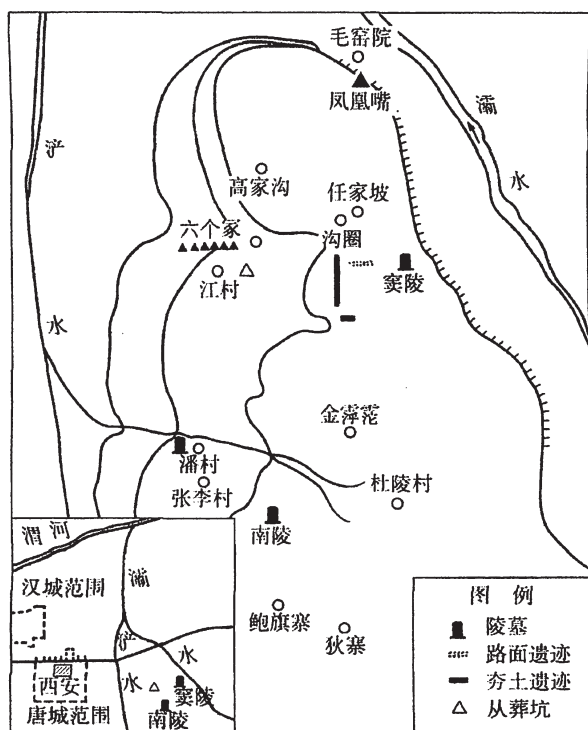


図1 任家坡从葬坑位置示意图

けて一周の磚の壁を形成し、墙内には角材を積み重ねた外椁を作り、外椁と第二周目の角材壁との間に、幅・高さそれぞれ約2mの外回廊があり、回廊の中には大量の木炭が堆積していた。第二周の角材壁には一端には門が設けられ、内は第二・第三の回廊となっており、盗掘者は三〇〇件近くの文物を盗み出したという。

楊・曹論文はこの墓葬形式を明言していないが、最近の発掘調査によると、「亜」字形の墓葬で、墓室の規模は約七五m四方で、深さ三〇mであり、四方に延びる墓道のうち東側が最も長く一三五mあるという。そして墓室の周囲には一〇〇座余りの外藏坑があり、いずれも長方形で、長さ四m～九〇m、幅は多くが五m前後、深さ五～八mであるという〔解説パネル〕。ちなみに、墓葬

周辺の外蔵坑の数だけ見ると、景帝の陽陵で八六座、武帝の茂陵で六三座⁽¹³⁾と比べても遜色のない、あるいはそれ以上の規模だともいえそうである。

二、南陵と江村大墓の発掘状況

「発掘収獲」によると、今回発掘したのは南陵西側（三座）および江村大墓の東北側（三座）と西南側（五座）の三か所の外蔵坑で、いずれも盗掘が深刻なところである。今回筆者は、このうちの南陵西側と江村大墓西南側の外蔵坑を実見した。その際に得た情報も参考にしながら、二つの墓葬の外蔵坑の発掘状況について紹介したい。

まず南陵の外蔵坑を紹介しよう。今回発掘した三座（NWK 1・NWK 2・NWK 3）⁽¹⁴⁾の外蔵坑はいずれも、西端に傾斜道を帯びた東西方向に向いた長方形の坑である。K 1は、長さ一八・五m、幅四・四m、深さ七mである。K 2は、長さ一七・五m、幅五・二m、深さ八mである。K 3は、長さ二〇m、幅六・四m、深さ七mである。このK 3の南側には回紋方磚で敷かれた道路が走っており、残長一九m、幅一・五mで、道路の東端は南陵封土の中に約二m入っているという〔「発掘収獲」一一四頁の写真参照⁽¹⁶⁾〕。この磚で敷かれた道路は筆者も実見したが、現場の説明によると西方にある長安（西安）に向かって伸びているとのことであった。ちなみにK 3は、「発掘収獲」一一三頁の南陵の全貌をとらえた写真でいえば、発掘エリアの建物がある奥になり、建物の手前側にK 1とK 2がある。

次に、江村大墓の二か所の外蔵坑を紹介しよう。まず墓葬の東北側に位置する外蔵坑である。今回発掘した三座（DNK 15・DNK 19・DNK 20）⁽¹⁷⁾の外蔵坑はいずれも北側に傾斜道があり、南北方向に向いた長方形の坑である。K 15は、長さ六八m、幅一・四～六・五m、深さ六・八m⁽¹⁸⁾。K 19は、長さ三三m、幅一・一～六・二m、深さ六・八m⁽¹⁹⁾。K 20は、長さ二七m、幅一・三～六・二m、深さ六・八mである⁽²⁰⁾。筆者は今回この外蔵坑は訪れなかったが、二〇一八年一月までに当該地区の表土を取り除き、外蔵坑の発掘を開始して盗掘坑を確認したという。

次に西南側の外蔵坑である。今回発掘した五座（DWK 22・DWK 27・DW

K29・DWK32・DWK38⁽²¹⁾の外蔵坑はいずれも東西方向に向いており、二〇一八年時点では、K27を除いて発掘が終わり出土物の整理中である。なお筆者が訪れた二〇一九年五月時点では、K27の発掘もかなり進んでいた。

次にそれぞれの規模をまず確認しておこう。K22は、東端に八段の階段状の傾斜があり、全長九・六m、幅一～五・四m、深さ四・三mになる。K27は西端に傾斜があり、全長三四・八m、幅〇・八～一〇・六m、深さ〇・七～五・四mである。⁽²³⁾K29は、長さ二・八m、幅一・五m、深さ九mである。⁽²⁴⁾K32は、長方形の坑で、長さ三・六m、幅二・三m、深さ七・六mである。⁽²⁵⁾K38は、長方形を呈し、全長六・三m、幅四・二～五m、深さ四・五mである。⁽²⁶⁾数値に現われているように、発掘対象の西南側外蔵坑五座の中では、K27が最も大規模である。ただ、解説パネルに示された図によると、東北側のK15と同等かそれ以上の規模を持つ外蔵坑も相当数にのほりそうである。

「発掘収獲」には、今回筆者が訪れた西南側外蔵坑からの遺物の出土状況が比較的詳細に記され、写真も豊富に掲載されている。そこで、これらの情報をもとに、西南側外蔵坑それぞれからの出土状況を簡単にまとめておこう。

K22は、西側中部に七〇～八〇cm前後の盗掘坑があり、そこから陶俑・陶器の破片などが出土した。坑の底部に木椁構造（長さ三・八m、幅二・七m、高さ二m）があり、朽ち果てているが、わずかに白色をした木灰の痕跡が残っている〔「発掘収獲」一一七頁の写真参照〕。さらに坑の西部から比較的整った陶俑が一三件発見され、そのうち衣服をまとっているのが六件（男性二体、女性四体で、高さはいずれも五七cm）と、半裸俑七件（上半身裸で、下半身に下着をまとっている、高さはいずれも六一cm）である〔「発掘収獲」一一六頁の写真参照〕。陶俑付近からは、銅製帯鉤をはじめ、銅製や鉄製の武器類そして砥石等が発見された。一方、坑の東部からは、大量の紅色・黒色・褐色の漆製遺物が発見されが、圧迫されて弁別できない。さらに多くの銅車馬の部品が散乱しており、少なくとも二揃いの明器の車馬が置かれていたと考えられる。このほか、陶罐2件（そのうち1件には口縁部に朱書がある）、⁽²⁷⁾銅製印章2枚（腐蝕が激しく印文は識別できない）がある。

K27では、一一か所の盗掘坑が発見され、そこから漆片、明器の建築材料、

銅銭、銅升、鉄権、楕円形の石、顔料等が出土した。明器の建築材料は、雲紋が施された瓦当（直径六cm）とL字形をした陶器の水道管（全長二五cm、直径四～八cm）である〔いずれも「発掘収獲」一一八頁の写真参照〕。楕円形の石は表面に光沢があり、長さ二二cm、幅一三cm、厚さ一〇cm、一つの面の中ほどに銘文がある〔「発掘収獲」一一六頁の写真参照〕。なお「発掘収獲」には一一七頁に発掘途中の写真が掲載されるが、筆者が訪れた時には、坑の底部まで発掘が進み、一一五頁に掲載されるK38の写真と同じような陶俑などの遺物が出ている状況であった。

K32は、K22と同様、底部に木椁（長さ二・九m、幅一・五m、高さ〇・七m）がある。木椁の棚木は保存状態が良く、合わせて一〇本ある。坑の中部に一頭分の整った馬の骨（体長二・三m）があり、北に向いて横たわる〔「発掘収獲」一一四頁の写真参照〕。坑の底の東北角に陶盆一件（口径五五cm、深さ一七cm）、南壁東部に陶罐一件（口径八cm、腹径三三cm、高さ約二四cm）、そして東壁中部に塑衣陶俑一件（二五cm）が置かれていた。なお「発掘収獲」でK32と同規模とされるK29については、発掘状況の記載はないので、その詳細は不明としなければならない。

K38にも、K22・K32と同様、坑底に木椁（長さ三・六m、幅一・九m、高さ約二m）があり、坑の西部からは着衣の陶俑三件、半裸陶俑八件が発見され、付近には鉄戟・鉄剣などの鉄製品があった〔「発掘収獲」一一五頁の写真参照〕。その他に、銅帶鉤・銅鏃・銅鏃等の銅製品もあり、坑の東部からは比較的多くの銅車馬の部品が見つかり、さらに明器の車馬の存在を推測させるスポークが明確に残る車輪の痕跡が見つまっている。このほか大きさの異なる陶罐五件・陶盆二件⁽²⁹⁾も見つまっている。坑の東部区域からは、大量の黒色・紅色・褐色の漆片が見つまっているが、相互に圧迫されて区別できない。

以上、「発掘収獲」の情報をもとに、南陵西側および江村大墓の東北側・西南側の外蔵坑の発掘状況を紹介した。特に今回の報告は、江村大墓西南側の外蔵坑の発掘成果に力点を置いていたのだらうと思われ、その外蔵坑からの出土状況が詳細に記される。ただそこからの出土物を見る限り、景帝陽陵の外蔵坑の出土状況と比較すると、重大な盗掘を受けた外蔵坑だということを前提にし

でも、貧弱であるといえる。しかし「質素」を旨とした文帝の墓葬だとすれば、あながち貧弱ともいえない。そもそも今回発掘したのは、一〇〇座余りある外蔵坑のうちの八座のみである。出土物の評価は、もう少し時間が必要であろう。

そこで次に、江村大墓＝文帝霸陵説を強く主張する楊・曹論文の論拠を検証し、江村大墓の性格を考えてみたい。

三、江村大墓の性格

そもそも楊・曹論文は、これまでの山を穿って陵墓とした（崖墓）とする考えに疑問を持ち、霸陵も他の一〇の前漢皇帝陵と変わらない墓葬形式、すなわち四方に墓道を持つ「亜」字形の墓葬だったのではないかと考える。

まず学説史の整理では、圧倒的に支持の多い崖墓説の紹介をした後、李銀徳氏と劉尊志氏の文帝霸陵＝堅穴岩（土）壙墓説を紹介する。李銀徳氏の論考は、その論題からも明らかのように、文帝霸陵の墓葬形式を中心に検証したものである。そこでは文献史料とともに、発掘調査によって得られた「山に因って陵と為した」諸侯王陵の形式との比較から、文帝霸陵は堅穴岩（土）壙墓説の可能性が大きいと推測する。一方、劉尊志氏は徐州地区の両漢時期の諸侯王陵に関する分析の一環として、文帝霸陵が李銀徳氏のいうように堅穴岩（土）壙墓ならば、山を利用しことから封土を作らなかったのだらうと推測する。⁽³⁰⁾

楊・曹論文は、李・劉両氏の論を踏まえて、霸陵の墓葬形式を五つの観点から検討する。⁽³²⁾一つ目は、立地条件である。鳳凰嘴が所在するのは白鹿原という台地の淵であって、これを九嶷山や秦嶺のような山塊と同一視することはできない。ここから、山塊を穿って造るような「崖墓」のはずはなく、伝統的な漢代皇帝陵と同じ立地条件だったと考える。

二つ目は、皇后陵との関係である。前漢皇帝陵は、皇后陵と“同塋異穴（陵園を同じくするが、墓室は異にする）”の合葬制度をとっており、二つの陵墓は同じ陵園内になければならず、また墓葬形式も同じ形式をとるはずだとする。この前提で、霸陵が鳳凰嘴だとすると、皇后陵との距離が二一〇mと離れすぎており、同一の陵園を形成できない。そして墓葬形式が、皇后陵が堅穴

土墳墓であれば、霸陵も同一であるはずであるとする。

三つ目は、皇帝陵と皇后陵の配置関係である。これは今の二つ目の観点とも関係するが、前漢では皇帝陵と皇后陵が東西に配置されるのが一般的である（「帝東后西」あるいは「帝西后東」）。鳳凰嘴が霸陵だとすると、竇皇后陵とは南北の関係になり、一般的な形式と合わない。そして、陽陵邑遺跡から「孝文東寢」という封泥が出土しており、東側が斜面になっている鳳凰嘴では無理があり、東側に寝園がある位置でなければならないだろう。

四つ目は、竇皇后陵が「亜」字形の墓葬だと考えられることから、霸陵も同一の形式になっているはずで、それを補強するものとして五つ目の観点として、文献（『水経注』）に霸陵は排水施設が四方に出ているとあることを挙げる。

以上から霸陵は、景帝の陽陵・武帝の茂陵と同じ形式の「亜」字形をした堅穴土墳墓だという。そしてその候補の墓葬として、竇皇后陵の西側から発見された「江村大墓」が挙げられるのである。

ただし楊・曹論文が示す五つの観点のうち、二つ目と三つ目以外は、かなりの推測によっていてにわかに従えない点もある。そこで二つ目と三つ目の観点を補強しつつ、江村大墓が霸陵である可能性を考えてみたい。ここで、江村大墓と竇皇后陵の位置関係を確認するために、グーグルの検索で閲覧可能な航空写真（二〇二〇年五月二日最終確認）からトレースした図を掲げておく【図2】。

実は楊・曹論文が示す二つ目と三つ目の観点は、陵園内における皇帝陵と皇后陵の位置関係に集約できる。鳳凰嘴を霸陵と見て、竇皇后陵との位置関係を考えれば、やはり両者は南北の関係になり、前漢の一般的な「帝東后西」「帝西后東」という位置関係から鳳凰嘴は、霸陵の可能性はかなり低くなる。その中で、霸陵の位置を推測すると、竇皇后陵が白鹿原の東縁に位置していることから、霸陵が竇皇后陵の東に位置する可能性はなく、「帝西后東」の関係を考えるのが妥当であろう。⁽³³⁾そして竇皇后陵の西で見つかったのが江村大墓なのである。これであれば、「同塋異穴」の位置関係としても妥当なのであろう。

楊・曹論文によれば江村大墓は、封土はないが墓室が約四〇m四方で、深さ



図2 寶皇后陵と江村大墓の位置関係

三〇mであり、その中を三重の回廊がめぐっているという。かなり丁寧な作りで、楊・曹氏がいうように、公主や諸侯王クラスの墓室ではないだろう。上に示したが、現地の解説パネルによると墓室の規模は七五m四方で、深さ三〇mだという。これは、近年の秦始皇帝陵のリモートセンシング調査による墓室の規模（東西約八〇m、南北約五〇m、深さ三〇m）と遜色のないものになる。⁽³⁴⁾ 正確なことはわからないが、大墓の開口部が七五m四方で、底部が四〇m四方だと考えれば、ある程度説明できるのではないだろうか。⁽³⁵⁾

これ以外で驚くべきは、一〇〇余りの外蔵坑が存在するということである。前にも触れたように、数的には景帝陽陵や武帝茂陵よりも多く、皇帝陵の外蔵坑と考えても不思議ではないだろう。二〇一九年段階ではまだ八座の外蔵坑しか発掘されていないが、さらに発掘が進んで、今回よりも規模の大きな外蔵坑からどのような遺物が出土するか、楽しみは尽きない。

もう一つ注目したいのは、解説パネルによると、四本の墓道に対応する位置に門闕が存在し、その内側に鶏卵石を敷き詰めた幅一・五mの道路が、一辺の長さ四〇〇mで墓葬区域を取り巻いているということである。これは、景帝陽陵の周囲を約四〇〇m四方の牆で取り囲んでいるの⁽³⁶⁾と、同様の意味を持つのではないだろうか。恐らく皇帝陵としての規模は、十分にあると考えられる。ちなみに前掲の地図【図2】でいえば、発掘区域の外を取り囲むように走ってい

る道路のあたりが、この塙になるのではないかと推測する。

それではなぜ、江村大墓には封土がないのか。これを文帝の霸陵と考えた場合、『史記』卷一〇文帝紀の後元六年（前一五八）条に見える「霸陵を治むるに皆な瓦器を以てし、金銀銅錫を以て飾と為すを得ず、墳を治めず、省を為し、民を煩わすこと母からしめんと欲す（治霸陵皆以瓦器，不得以金銀銅錫為飾，不治墳，欲為省，母煩民）。」とあることに注目したい。ここでは単に「墳＝封土を作らない」と言っているだけで、「山に因って云々」とはしていない。さらに『漢書』卷三六劉向伝に、劉向が成帝を諫める文言の中に「孝文焉を寤（さと）り、遂に薄葬して、山墳を起さず（孝文寤焉，遂薄葬，不起山墳）」というのも参考になる。ここでも「山墳」＝封土とだけである。「山に因って」というのは、班固以降の人々の考えなのではなかろうか。恐らく文帝は、民の負担を軽減するために墳＝封土を作らなかったというのが、本来の意味なのではなかろうか。

筆者は、江村大墓が文帝霸陵だということに対して、一定の妥当性があると考えている。これが証明されるためには、さらに発掘調査がすすみ、正式な発掘報告が発表されるのを待つ必要がある。

おわりに—今後の展望を兼ねて

本稿では、筆者が訪れた江村大墓について、最近発表された発掘報告（「発掘収獲」）と現地で得た情報に基づきながら、この大墓が真の文帝霸陵と考える楊・曹論文の論旨を確認することによって、その性格を考えた。その結果、江村大墓が文帝霸陵の可能性は十分にあるということを指摘した。そして今まで霸陵だと考えられていた鳳凰嘴は、そこから人の手が加わった形跡がみつかっていないことから、これが陵墓である可能性はほとんどなくなったと考えられる。

そして皇后陵との関係からいっても、「帝西后東」の制度に則った“同塋異穴”の伝統的な前漢の皇帝陵の形式であった、ということが可能になる。ただしこれを証明しようとすれば、さらなる発掘調査が必要となろう。その全貌が判明する日を心待ちにして、本稿を閉じることにしたい。

なお残された問題として、霸陵邑の存在がある。『漢書』地理志には、秦の時代の芷陽を改めたということが記されるが、この陵邑の位置が未だ確定していないようである。霸陵邑の位置が確定して、これと霸陵陵区の位置関係が明らかになれば、新たな霸陵像が現われると考える。

注

- (1) 参考までに、日程順に訪問先を掲げておく。
 - 五月二七日、中国西安への移動〔咸陽泊〕
 - 五月二八日、唐順陵（遠望）、漢長陵、秦咸陽宮博物館・秦咸陽城一号宮殿遺跡、咸陽市博物館、乾陵博物館（永泰公主墓）、乾陵〔乾県泊〕
 - 五月二九日、昭陵博物館（李勣墓）、長樂公主墓、韋貴妃墓、昭陵、建陵〔西安泊〕
 - 五月三〇日、秦始皇兵馬俑博物館、秦始皇帝陵、大明宮遺跡〔西安泊〕
 - 五月三一日、漢薄太后南陵、江村大墓、陝西歴史博物館、中国社会科学院考古研究所博物館西安分館、大雁塔〔西安泊〕
 - 六月 一日、草堂寺、香積寺、碑林博物館、西安博物院〔西安泊〕
 - 六月 二日、早朝便にて帰国
- (2) 今回、発掘現場で解説をしていただいたのは、馬永嬴氏（発掘隊長）および譚青枝氏（陝西省考古研究院）である。
- (3) 『2018 中国考古重要考古発現』文物出版社、二〇一九年所収。一一三～一一九頁。
- (4) 『考古』二〇一五・一八、二〇一五年。
- (5) 「発掘収獲」に触れられるように、江村大墓を含む「霸陵陵区」の発掘は、陝西省考古研究院と西安市文物保護考古研究院の共同で行われている。
- (6) 本稿で利用する解説パネルは、南陵および江村大墓の発掘現場に掲げてあったもの（二〇一九年五月三一日現在）であり、ここで使用するものは、このパネルから筆者が記録してきたものである。
- (7) 『史記』卷一〇文帝紀・後六年（前一五八年）条に、

治霸陵皆以瓦器，不得以金銀銅錫為飾，不治墳，欲為省，毋煩民。

とある。同じく文帝紀の後七年（前一五七）の文帝遺詔の「霸陵山川因其故，毋有所改」の『集解』に引く應劭注に、

因山為藏，不復起墳，山下川流不遏絕也。就其水名以為陵號。

とある。また『漢書』卷四文帝紀・贊に、

……治霸陵，皆瓦器，不得以金銀銅錫為飾，因其山，不起墳。

とある。

- (8) 呼林貴「黒色裸体漢俑の鑑定」『文博』二〇〇三—四、二〇〇三年。
- (9) 陝西省考古研究所『白鹿原漢墓』三秦出版社、二〇〇三年。
- (10) 楊・曹前掲論文。
- (11) 劉慶柱・李毓芳著、來村多加史訳『前漢皇帝陵の研究』（学生社、一九九一年。原著一九八七年）七四頁。
- (12) 同上、二〇六頁。
- (13) 陽陵および茂陵の外蔵坑の数値は、咸陽市文物考古研究所編『西漢帝陵鉤探調査報告』（文物出版社、二〇一〇年。三七頁および四六頁）による。
- (14) NWKは、南陵〔nanling〕、西側〔west〕、坑〔kang〕の略だろう。これは解説パネルに示された略号であって、「発掘収獲」にはNWの略号は記されない。
- (15) ここに示した数値は、「発掘収獲」のものではなく、解説パネルの数値によった。ちなみに「発掘収獲」の数値では、K 1は、長さ三八m、幅二～六・六m、深さ五・八m。K 2は、長さ四二m、幅一・四～七・六m、深さ七・三m。K 3は、長さ二一m、幅一・四～六m、深さ六・七m。数値が大きく異なる部分（特にK 1・K 2）があり、解説パネルの掲載の図を参考すると、解説パネルの数値の方が近いと判断してこの数値を採用した。
- (16) 訪問時には、写真に見える磚の道路の左側（北側）が掘りこまれ、発掘がさらに進んでいた。
- (17) DNKは、大墓〔damu〕、北側〔north〕、坑〔kang〕の略だろう。注14と同様、「発掘収獲」には「DN」の略号は付されない。
- (18) 解説パネルではそれぞれ、七〇m、八・八m、七mである。
- (19) 解説パネルではそれぞれ、二七m、五m、七・二mである。
- (20) 解説パネルではそれぞれ、二五m、五m、六・八mである。
- (21) DWKは、大墓〔damu〕西側〔west〕坑〔kang〕の略だろう。注14と同様、「発掘収獲」には「DN」の略号は付されない。
- (22) 解説パネルではそれぞれ、六・四m、四・八m、五mである。
- (23) 解説パネルではそれぞれ、三四・八m、一〇m、一～六mである。
- (24) 「発掘収獲」（一一五頁）は、K32と同程度の規模だというのが、K29の規模に関する具体的数値を記しておらず、ここでは解説パネルの記載による。
- (25) 解説パネルではそれぞれ、四m、二・五m、八mである。
- (26) 解説パネルではそれぞれ、六・五m、四・六m、五mである。
- (27) 「発掘収獲」一一六頁掲載の写真参照。ただし、口縁部に朱書がある陶罐はK38からも出土しており、一一六頁の写真がどちらのものか判断できない。
- (28) この銅升は長さ九cm、高さ二cmである。「発掘収獲」一一七頁の写真にこれを指すと思われる銅升が掲載されている。
- (29) 出土陶罐のうち三件に朱書がある。大罐は口径一〇cm、腹径一七cm、高さ一

五cm、小罐は口径五cm、腹径八cm、高さ九cmである。また陶盆二件うち一件に朱書があり、比較的狀態のよい方の陶盆は、口径一八cm、高さ五cmある。なお注（27）にも記したように、「発掘収獲」一一六頁のある陶器が、K22のものなのか、K38のものなのかは判然としない。

- (30) 李銀徳「論漢代的因山為陵」『古代文明』四、二〇〇五年。
- (31) 劉尊志「徐州兩漢諸侯王墓研究」『考古學報』二〇一一一一、二〇一一年。九二～九三頁。
- (32) 楊・曹論文、一一五～一一七頁。
- (33) 注（11）劉・李著書によれば、前漢における皇帝陵と皇后陵の位置関係は「帝西后東」が一般的だったとする（二三三頁）。
- (34) 学習院大学東洋文化研究所・東海大学情報技術センター共編『宇宙と地下からのメッセージ～秦始皇帝陵とその自然環境』六六頁参照、(株)D-CODE、二〇一三年。
- (35) ただし、解説パネルの情報に基づく、薄太后南陵の墓室も七五mを超える大規模なものである。墓室の実際の規模については、正式の発掘報告を待たなければならぬだろう。
- (36) 注（13）前掲『西漢帝陵鉛探調査報告』参照。

追記：本稿執筆中に妻が入院（五月一八日）。脱稿後、刊行を待たずに逝ってしまった（六月一九日）。ここで取り上げた江村大墓も、一緒に訪れた思い出の地である。この小文を妻の霊前に奉げたい。（八月一日記）